

東日本視察交流記（7） 無施肥・無農薬の自然栽培
6月12日（日）（その3）

昼食をお蕎麦屋さんでとって、鳴子温泉、川渡温泉に行った。建物のなかには入らなかったが、南三陸町などから避難者が来ている。（帰ってから見た新聞記事には、温泉旅館で避難生活している人は体調を崩している人が多い。ただ1か所、みな元気だったのは、温泉のなかにあるセンターを避難所にして自分たちで炊事しているところだ、というのである。皮肉なものである。）



加美町にある比較的広い耕作放棄地 2 か所を見た。どちらもおよそ 1.8ha ほどである。道路にも面していて何とかなりそうであるが、問題は所有者の同意を得なければならないことだ。1 か所は数名であるが、もう 1 か所は 40 名もいるという。

4時ごろ、加美町にある長沼さんの自然楽農園についた。NPO 法人木村秋則自然栽培に学ぶ会を主宰している。ちょうど岩手県奥州市から阿部さん、県内登米市から成澤さんが来ていて、われわれが到着するのを待っていてくれた。

無施肥・無農薬で 10 年の月日をかけてリンゴ栽培に成功した「奇跡のリンゴ」の木村農法を田や畑に生かそうと実践している人たちなのだ。

写真の左奥に見える田に植わっているのは、田植えに失敗したようなヒョロヒョロの苗である。ところがこれが次第に根を強く張っていき、普通の田植えの稲を追い越してしまうのだそうだ。



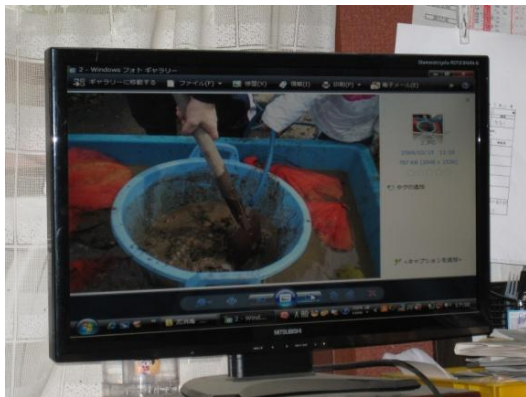
長沼さんは、他の人から預かって 18ha を作っているので、自然栽培は 5ha。ササニシキの親のササシグレも栽培している。ふつう 8 俵取れるところ、ササシグレは 5~6 俵である、という。

全国から来る研修も受け入れられている。写真の看板は、加美町に新しく合併した 4 つの幼稚園の園児を招いて、仲良くやっといこうと一緒に田植

をした時の看板である。自然を敬い、人を大事にする長沼さんの気持ちがよく表れている。

阿部さんも10haほどの作付けのうち1/3ほどを自然栽培で行っていて、除草は除草機を使って行う。お米以外にも、レタスや枝豆、豆類をお母さんとともに育てていて、お米と同様に甘味があり味がしっかりしている、という。

成澤さんは10haの自然栽培をしているという。自然栽培は6年目で、限界への挑戦であるかのように除草も手でやっているとのこと。できたものは信頼のできる取引先にしか流さないという。



写真左は、種もみを土で消毒している様子なのだ。土の中の良い菌で消毒するというのである。さまざまな自然農法の工夫がこのようにパソコンの映像で編集されていて、皆で勉強をしているのである。私もゆっくりすべて見たかったが、時間がなかった。次の機会にしよう。

「本当の農業をやろうとしたら10haが限度です。それで家族が生活できるような、そんな農業にしなければならない」と長沼さんが最後に言った。あるべき農政の姿を一言で表したように感じた。



田圃のなか、1.5m四方の枠のなかに植わっている苗を指して長沼さんは「これは広島で被爆した種もみから作った苗です。ふつうと比べてやはり成長が悪いです」と説明してくれたのが、印象に残った。

皆さんに別れを告げて、佐々木さんとともに古川に戻った。佐々木さんにとって、この人たちが作ったお米を自分が作った色とりどりのケースに入れて消費者に届けるのがひとつの夢なのである。

土蔵群を改装した古川のレトロスポットで古川名物、黒豚のしゃぶしゃぶの夕食を取って、きょう1日の行程を終えた。さあ、明日は強行軍だ。

(6月12日 終り)